

ひろしまオペラルネッサンス公演 「コジ・ファン・トゥッテ」

W.A. モーツァルト作曲(全2幕、イタリア語上演、字幕付)

読者プレゼント
(P.15に詳細)

♪ 「コジ・ファン・トゥッテ」はこんな作品・・・

「コジ・ファン・トゥッテ」はモーツァルトと台本作家ダ・ポンテの黄金コンビが描いた3作目のオペラです。多彩なアンサンブル(二人以上で歌う)で“アンサンブル・オペラ”の決定版とも言われ、その美しい音楽は登場人物に豊かな感情を吹き込んでいます。また、それまでのバロック、古典オペラのように神話や英雄を扱うのではなく、彼らの生きた18世紀末を舞台にして、当時の貴族社会を揶揄しながら、社会に翻弄される人間のドラマを描くことに挑戦しました。「コジ・ファン・トゥッテ」とは「女はみんなこうしたもの」という意味。初演当初、その内容が不道徳と言われたこの作品は、時代を超えてなお、人間の尊厳や幸せとは何かを問いかけています。

♪ 聴きどころの一つ、チェンバロに注目!

今回の舞台では稀少な楽器、チェンバロも登場します。練習でチェンバロ奏者を務める4名の方にその魅力について聞きました。

色とりどりの美しい花が描かれています。椅子もカワイイ花柄。



本番で使用されるチェンバロ。普段はフェニックスホール地下の空調管理された楽器庫で大切に保管されています。

● ピアノとはどこが違う?



練習ピアノ(チーフ)
岡野三枝さん

チェンバロは、バロック時代(1600年頃からの約150年間)に活躍した楽器です。バッハをはじめとしたその時代の作曲家は、多くの作品を作りました。ピアノとチェンバロは形が似ていますが、音の出るしくみや強弱の有無、響き、など知れば知るほど違いがあることがわかります。

● 演奏者からみた魅力は?



練習ピアノ
枝川泰子さん

オペラの中でチェンバロ奏者は、レチタティーヴォセッコを歌手がどう表現したいのを感じ取り、ふさわしい音を紡いでいきます。指揮者、演出家、歌手に寄り添いながら、臨機応変に感性を働かせ、ドラマを作り上げていく過程は大きな魅力です。

● 弾く時の難しさとは?



練習ピアノ
越前皓也さん

初めて弾いた時はピアノとの鍵盤のタッチや幅の違いに戸惑いました。また、レチタティーヴォでは舞台上の演技に合わせて即興的に伴奏をしていくため、タイミングや音の選び方が難しいです。重責ですが、歌手と一緒にドラマを進めていっている実感がありとても楽しい役割です。

● 今回はどんなシーンで登場する?



練習ピアノ
三上恵理子さん

レチタティーヴォ・セッコという、会話的な抑揚で語るように歌う部分にチェンバロが伴奏として登場します。独白や会話によって、物語が進行や展開をするシーンが多いです。歌い手と息を合わせて状況や感情を効果的に表現しているチェンバロの演奏が見所です。

公演情報



指揮：川瀬賢太郎
演出：岩田達宗
管弦楽：広島交響楽団
合唱：ひろしまオペラルネッサンス合唱団
時：9月30日(土)14:00～
10月1日(日)14:00～
会：JMSアステールプラザ 大ホール
料：SS席8,000円、S席6,500円、
A席5,000円、B席3,500円、
学生券2,000円※学生券は当日のみ販売。

問：ひろしまオペラ・音楽推進委員会(JMSアステールプラザ内) TEL082-244-8000

～どんな物語?～

当時の貴族の女性は、親が決めた男性と結婚して子どもを産むというのが、幸せのマニュアルでした。この作品は「婚約者が戦地に行った後、目の前に魅力的な男性が現れたら、果たして女心はどうなるのか」を試すという、女性の心を試す物語です。試される女性にとっては何とも酷い話。しかしそれがきっかけで、登場人物たちは自分にとって本当の幸せとは何かを考え始めることになります。「幸せ」とは何でしょうか。モーツァルトとダ・ポンテの問いかけが音楽に乗って聴こえてきます。